

各関係機関団体の長
各病虫害防除員
農業資材販売等関係者 } 殿

福岡県病虫害防除所長

平成20年度病虫害発生予報第3号(7月)について

このことについて、病虫害発生予報第3号を発表したので送付します。

イチゴ炭そ病・うどんこ病の防除を徹底しましょう!

イチゴの炭そ病は、雨やかん水等によって感染します。本年は、採苗時期の雨が多いため、炭そ病の感染が拡大する恐れがあります。

また、うどんこ病は、「あまおう」にかわり、「とよのか」に比べて発生は少ない傾向でしたが、本年は育苗期から多く見られます。特に雨よけ栽培では、ほ場が乾燥するために発生しやすい環境になります。

育苗期の防除を徹底し、本ぼへ持ち込まないように注意しましょう。

イチゴ炭そ病の病徴



ランナーの陥没病斑

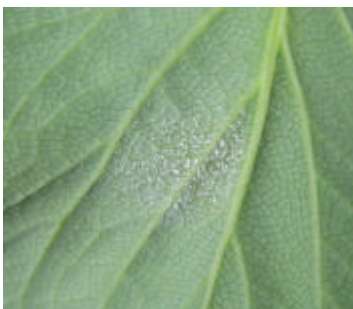


葉の病斑(汚斑)



クラウン部の褐変

イチゴうどんこ病の病徴



葉裏の白い菌叢



上向きに葉が巻く

防除のポイント

梅雨明け以降、気温の上昇に伴い、炭そ病の発生が多くなる。発病株は早めに処分する。

うどんこ病は、新葉に感染しやすい。下葉の罹病葉は早めに除去する。

長雨、台風等の前後、葉かき作業後等は重点的に薬剤散布を行う。

多肥栽培を避ける。

予報第3号

向こう1か月間における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	発生時期 (予想)	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
		平年比	平年比	平年比	前年比
水稲	いもち病(葉いもち)	-	並	並	並
	ヒメトビウンカ	-	並	並	並
	縞葉枯病	-	並	やや多	並
	セジロウンカ	-	並	並	並
	トビイロウンカ	-	並	並	並
	コブノメイガ	-	並	並	並
かんきつ	黒点病	-	並	並	やや多
	ミカンハダニ	-	並	並	並
なし	ナシヒメシンクイ	-	並	並	並
ぶどう	べと病	-	並	やや多	並
かき	炭そ病	-	並	やや多	やや多
	フジコナカイガラムシ	-	やや多	やや多	やや多
いちじく	アザミウマ類	-	多	多	並
果樹共通	カメムシ類	-	やや少	-	並
茶	炭そ病	-	少	少	少
	輪斑病	-	並	少	並
	カンザワハダニ	-	少	並	並
	チャノコカクモンハマキ	-	少	少	並
	チャノホソガ	やや遅	並	並	少
	チャノミドリメコバエ	-	多	やや多	並
	チャノキイロアザミウマ	-	多	やや多	やや多
イチゴ	うどんこ病	-	並	並	並
	炭そ病	-	少ない	並	やや多

* 果樹共通 カメムシ類の発生量(現況)は前年比

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

期間の前半は平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。後半は平年より晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の気温は平年より高いでしょう。降水量は少なく、日照時間は並か多いでしょう。

週別の気温は、1週目は平年並、2週目は高く、3~4週目は並か高いでしょう。

要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	20	30	50
降水量	40	30	30
日照時間	20	40	40

(福岡管区气象台 20年6月27日発表抜粋)

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（ + ）は発生を助長する要因、（ - ）は発生を抑制する要因、（ ± ）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【普通作物 - 水稻】

1 いもち病（葉いもち）

（1）予報の内容

発生量：平年・前年並

（2）予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

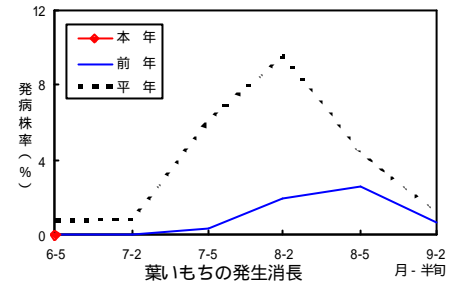
発病株率0%（平年0.7%、前年0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている（-）。

（3）防除上の注意

ア 補植用の置き苗は本病の発生源となるので、早めに処分する。

イ 防除薬剤については「平成20年度普通作病害虫・雑草防除の手引き」を参照する（以下の病害虫についても同様）。



2 ヒメトビウンカと縞葉枯病

（1）予報の内容

発生量：平年・前年並（ヒメトビウンカ）

平年よりやや多、前年並（縞葉枯病）

（2）予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった。（±）

ヒメトビウンカ10株当たり成幼虫数2.5頭（平年1.0頭、前年2.9頭）

縞葉枯病発病株率0%（平年0%、前年0%）

イ 越冬世代のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は6.4%と平年より高かった（平年2.8%、前年4.1%）（+）。

ウ 移植期が早い一部のほ場では、本種の発生量が多かった（+）。

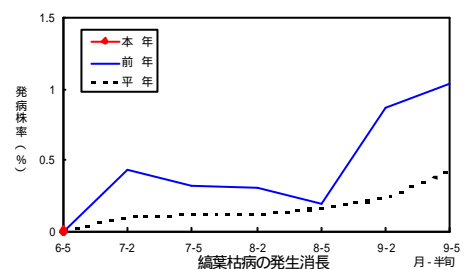
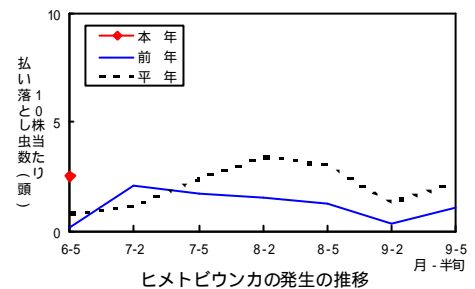
エ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている（+）。

（3）防除上の注意

ア 箱施薬剤が施用されていないほ場や移植期が早い（5月上旬～6月上旬植）ほ場は発生状況に注意する。

イ 越冬世代のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率が高いため、本種の発生が多い場合は効果の高い薬剤で防除を実施する。

ウ 発病株を認めたら直ちに除去する。



3 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月17日に筑後市の予察灯で初飛来を確認した(+)。

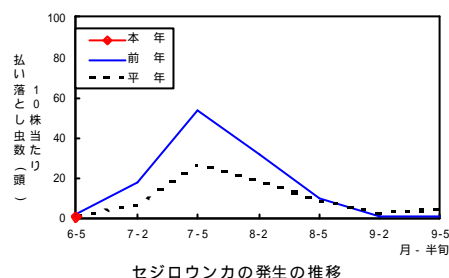
イ 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

10株当たり成幼虫数0.6頭(平年0.9頭、前年1.1頭)

ウ 向こう1か月の気象予報では、期間の前半は曇りや雨の日が多い梅雨期間が続くとされていることから、今後も本種の飛来が予想される(+)

(3) 防除上の注意

梅雨期間中は頻繁に飛来があると考えられるため、今後の飛来状況に十分注意する(当所ホームページの病害虫の発生動向を参照)。



4 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生を認めていない(±)。

10株当たり成幼虫数0頭(平年0.01頭、前年0.01頭)

イ 向こう1か月の気象予報では、期間の前半は曇りや雨の日が多い梅雨期間が続くとされていることから、本種の飛来が予想される(+)

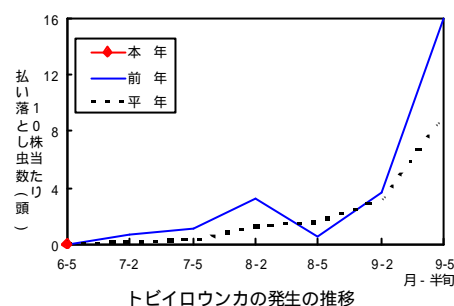
(3) 防除上の注意

ア 6月28日現在、飛来は確認されていないが、今後の飛来状況に十分注意する(当所ホームページの病害虫の発生動向を参照)。

イ 箱施薬剤が施用されていないほ場や移植期が早い(5月中旬~6月上旬植)ほ場では、発生状況に注意する。

ウ 移植期が早いほ場では、箱施薬剤の残効がなくなっている恐れがあるため、本種の発生に特に注意する。

エ ほ場内では集中分布をするので、ほ場全体を見て発生状況を把握する。



5 コブノメイガ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、普通期水稻のほ場では発生を認めていない(±)。

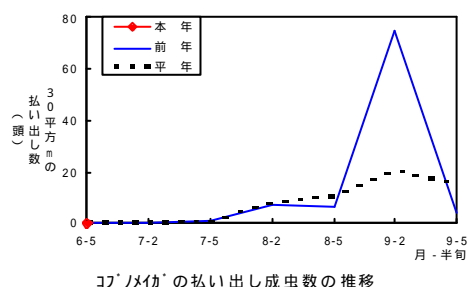
30m²当たり払い出し成虫数0頭(平年0.03頭、前年0頭)

イ 向こう1か月の気象予報では、期間の前半は曇りや雨の日が多い梅雨期間が続くとされていることから、本種の飛来が予想される(+)

(3) 防除上の注意

ア 当所ホームページに病害虫の発生動向を掲載するので参照する。

イ コブノメイガに効果のある箱施薬剤(フィプロニルやスピノサド等を含む薬剤)が施用されていないほ場や、移植時期が早い(5月中旬~6月上旬植)ほ場では、今後の発生動向に注意する。



【果樹】

1 かんきつ黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病果率 0.2% (平年 0.2%、前年 0.1%)

発生ほ場率 7.1% (平年 9.6%、前年 11.8%)

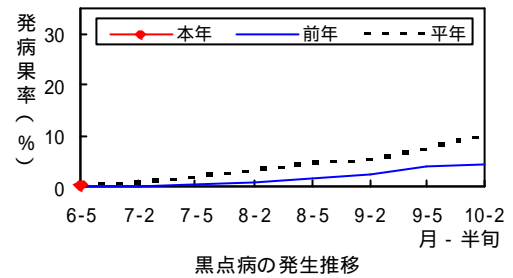
イ 梅雨入り後の降雨日数が多く、発生に好適な気象条件が続いている(+)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、期間の前半は平年と同様に曇りや雨の日が多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出して処分する。

イ 前回の散布から25日又は積算降水量250mmを目安に予防散布を行う。



2 かんきつのみかんハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

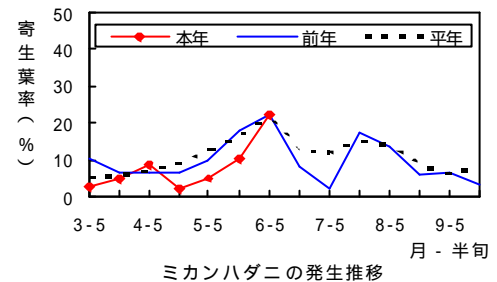
寄生葉率 22.5% (平年 21.8%、前年 22.1%)

発生ほ場率 73.3% (平年 65.8%、前年 58.8%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、期間の前半は平年と同様に曇りや雨の日が多いとされている(±)。

(3) 防除上の注意

薬剤防除に当たっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。



3 なしのナシヒメシクイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

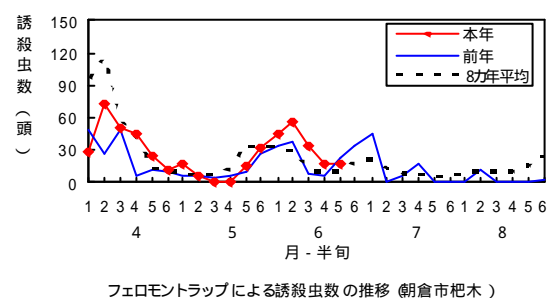
(2) 予報の根拠

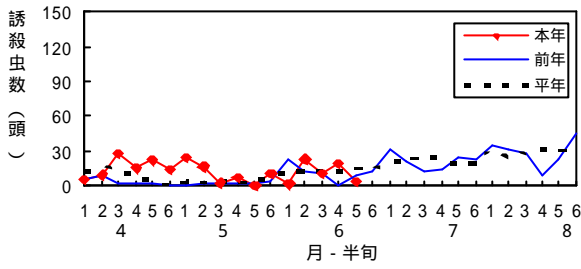
ア 第1世代成虫発生時期から6月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数は平年並であった(±)。

(県内3カ所の平均)

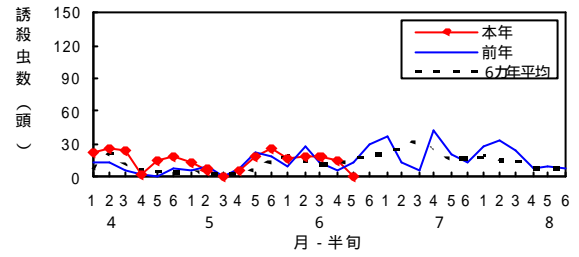
139頭 (平年 112頭、前年 110頭)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、期間の前半は平年と同様に曇りや雨の日が多いとされている(±)。





フェロモントラップによる誘殺虫数の推移(黒木町)



フェロモントラップによる誘殺虫数の推移(筑後市和泉)

(3) 防除上の注意

- ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は平坦地域で6月下旬から7月上旬、山間地域で7月上旬頃と予想されるので、発蛾最盛期直後を目安に防除を行う。なお、発蛾最盛期を過ぎても成虫が多く見られる場合は、更に7~10日後に追加防除を行う。
- イ 幼虫は主に果頂部から果実に食入加害するので、防除に当たっては果実に薬液が十分かかるように散布する。
- ウ 被害果は埋没処分し、発生源を除去する。

4 ぶどうべと病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月10日に施設栽培のベリーAで、24日に露地栽培の巨峰で初見。
- イ 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

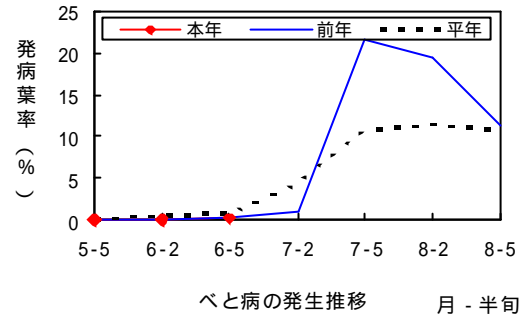
発病葉率 0.2% (平年0.8%、前年0.2%)

発生ほ場率 25.0% (平年27.3%、前年 33.3%)

- ウ 梅雨入り後の降雨日数が多く、発生に好適な気象条件が続いている(+)
- エ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、期間の前半は平年と同様に曇りや雨の日が多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

- ア 発病後の防除では防除効果が低いので予防散布を徹底する。
- イ 伝染源となる罹病葉は見つけ次第取り除き、園外に持ち出し処分する。
- ウ ボルドー液は、散布直後に降雨があると薬害が発生するので注意する。



べと病の発生推移

5 かき炭そ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

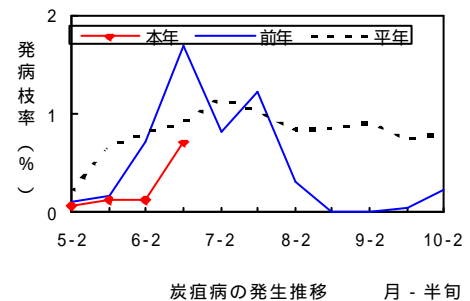
発病枝率 0.7% (平年 0.9%、前年 1.7%)

発生ほ場率42.9% (平年 27.5%、前年 31.3%)

発病果率 0% (平年 0.2%、前年 0%)

発生ほ場率 0% (平年 9.6%、前年 0%)

- イ 梅雨入り後の降雨日数が多く、発生に好適な気象条件が続いている(+)
- ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、期間の前半は平年と同様に曇りや雨の日が多いとされている(+)



炭疽病の発生推移

(3) 防除上の注意

ア 樹冠内部の徒長枝に発病しやすいので、伝染源となる罹病枝や果実は見つけ次第取り除き、園外に持ち出し処分する。

イ 前年発生が多かった園や本病に弱い早秋では薬剤防除を徹底する。

6 かきのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

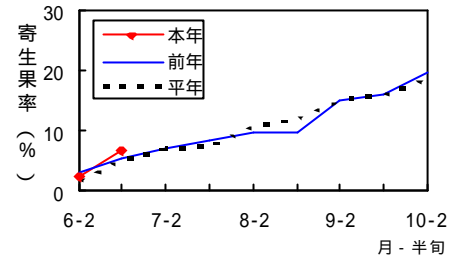
(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)。

寄生果率 6.9%(平年 5.1%、前年 5.4%)

発生ほ場率 71.4%(平年60.5%、前年81.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、期間の前半は平年と同様に曇りや雨の日が多いとされている(±)。



フジコナカイガラムシの発生推移

(3) 防除上の注意

ア 薬剤防除は、混み合った枝・葉を整理するとともに、十分な薬量で散布ムラのないよう丁寧に散布する。

イ 合成ピレスロイド系薬剤等は、本種の天敵に悪影響を及ぼすので極力使用を控える。

7 いちじくのアザミウマ類

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年並

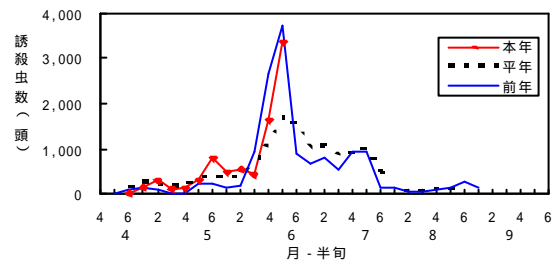
(2) 予報の根拠

ア 6月1半旬から5半旬までの誘引剤による誘殺虫数は平年より多かった(+)。

(調査地点：行橋市西泉)

6,488頭(平年 4,436頭、前年 7,676頭)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、期間の前半は平年と同様に曇りや雨の日が多いとされている(±)。



誘引剤によるアザミウマ類の誘殺虫数の推移(行橋市)

(3) 防除上の注意

ア 6~8月に開花する雑草が発生源となるので、園地周辺の草刈りを行う。

イ 柵井ドーフィンでは下位節で2.5~3cm大の幼果の開口部を逐次テーピングし、侵入を防止する。

8 果樹共通のカメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：前年並

(2) 予報の根拠

ア 4月1半旬から6月5半旬までの予察灯総誘殺虫数は前年並であった。

(調査地点：本所管内筑紫野市)(±)

チャバネアオカメムシ 607頭(前年 743頭)

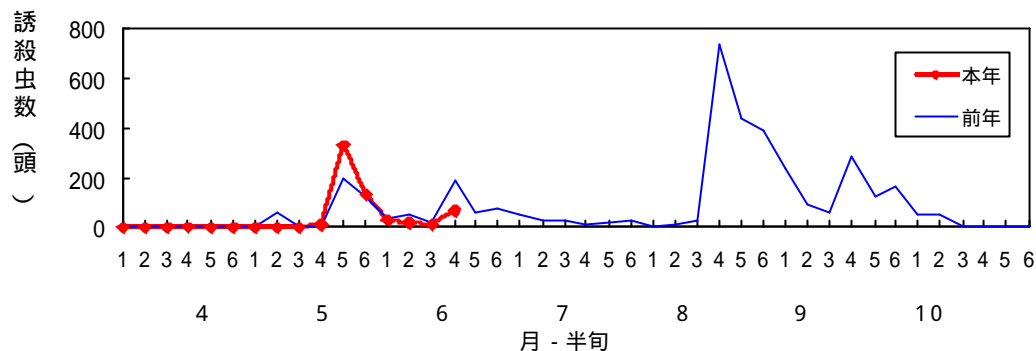
ツヤアオカメムシ 1,645頭(前年 553頭)

(調査地点：筑後支所管内八女郡黒木町)(±)

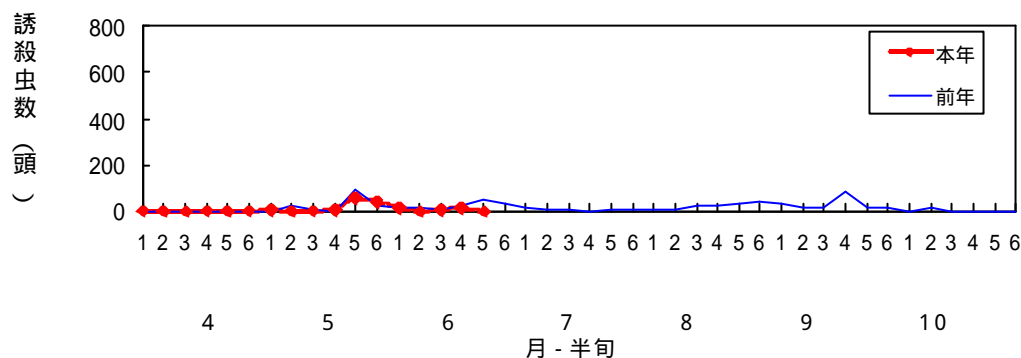
チャバネアオカメムシ 151頭(前年 243頭)

ツヤアオカメムシ 79頭(前年 43頭)

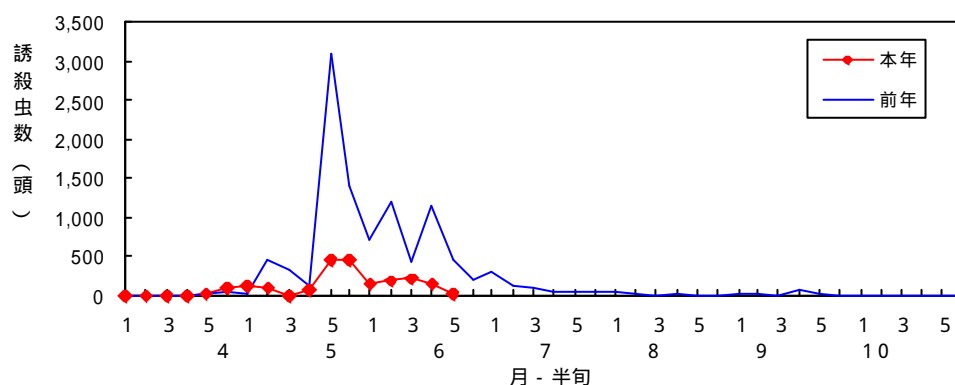
- イ 4月1半旬から6月5半旬までのフェロモントラップの総誘殺虫数は前年より少なかった。
 (調査地点：筑紫野市吉木) (-)
 チャバネアオカメムシ 2,007頭(前年 9,481頭)
 ツヤアオカメムシ 1,106頭(前年 498頭)
- ウ 6月5半旬調査では、ナシ果実の被害果は認められなかった(-)。
 被害果率 0%(前年 0%、平年 0.4%)
- エ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、期間の前半は平年と同様に曇りや雨の日が多いとされている(+)



予察灯によるチャバネアオカメムシの誘殺虫数の推移 (筑紫野市)



予察灯によるチャバネアオカメムシの誘殺虫数の推移 (黒木町)



集合フェロモントラップによるチャバネアオカメムシの誘殺虫数の推移 (筑紫野市)

(3) 防除上の注意

- ア 7月までは、前年と同様に発生は少なく経過すると予想されるものの、常発地域やスギ、ヒノキ林に近接する園地では突発的な飛来もあるので、園内の発生状況の把握に努め、発生に応じて防除を行う。
- イ 樹種によって使用できる薬剤が異なるので使用基準(作物登録の有無・使用回数等)に留意する。

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
	平年比	平年比	前年比
ナシ ハダニ類	やや少	やや少	並
カキ うどんこ病 ハマキムシ類	やや少 並	並 並	やや少 並

【茶】

1 炭そ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

発病葉数 0葉(平年 0.4葉、前年 0.6葉)

発生ほ場率 0%(前年13.6%)

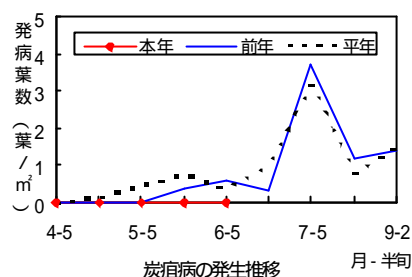
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(-)。

(3) 防除上の注意

ア 摘採残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。特に最終摘採後の新芽に対する防除を徹底する。

イ 雨滴により孢子が飛散伝搬するので、降雨前の薬剤防除の効果が高い。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 輪斑病

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病葉数 0葉(平年 0.02葉、前年 0葉)

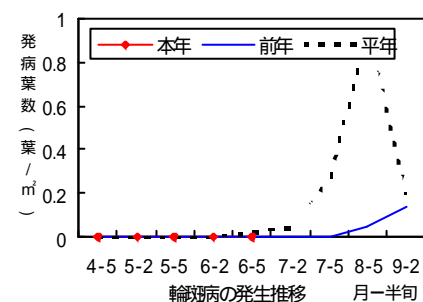
発生ほ場率 0%(前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(-)。

(3) 防除上の注意

ア 病原菌は、葉や茎の傷口から侵入感染するため、二・三番茶摘採又は刈落とし当日か翌日に防除を行う。

イ 本病の発生園では、新梢枯死症も発生しやすいので注意する。



3 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

寄生葉率 0.4% (平年 7.0%、前年10.2%)

50葉当たり虫数0.3頭 (平年24.1頭、前年18.8頭)

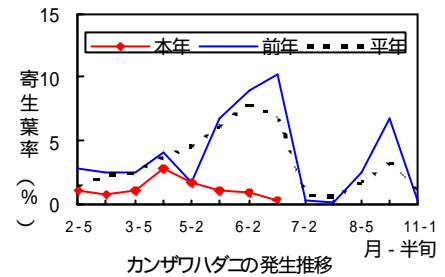
発生ほ場率 13.0% (前年59.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上である場合は防除を行う。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



4 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月1半旬から6月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数は平年より少なかった(-)。

調査地点：筑後市 90頭 (平年 282頭、前年 106頭)

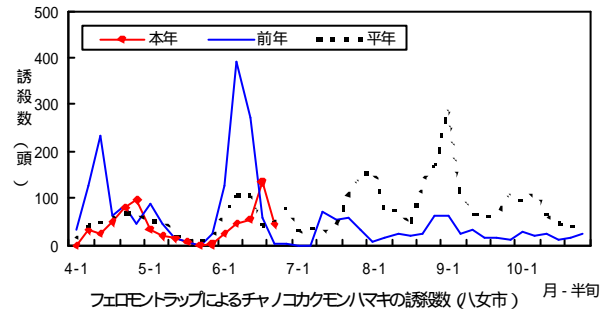
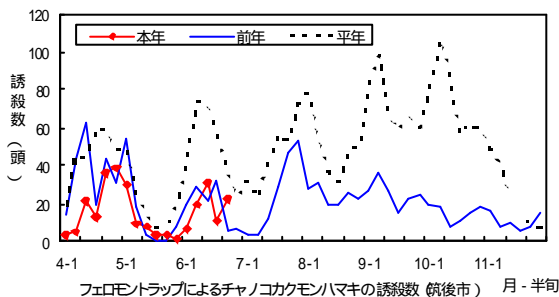
八女市 307頭 (平年 368頭、前年 852頭)

イ 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

被害葉数 0葉 (平年 0.04葉、前年 0.05葉)

発生ほ場率 0% (前年 9.1%)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(+)



(3) 防除上の注意

ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は7月下旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、最盛期から7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。

5 チャノホソガ

(1) 予報の内容

発生時期：平年よりやや遅、前年並

発生量：平年並、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数は平年並であった(±)。

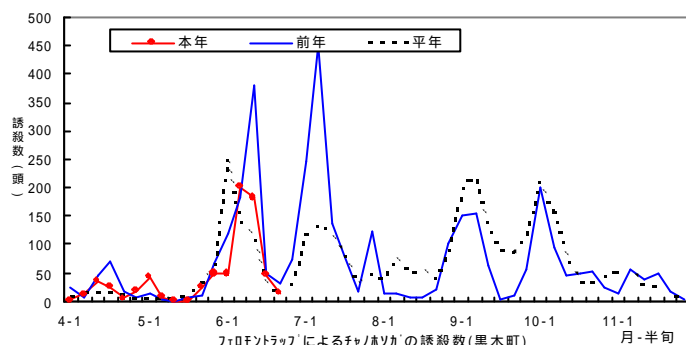
調査地点：黒木町 705頭 (平年 741頭、前年 1,023頭)

イ 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

被害葉数 0.8葉(平年 1.3葉、前年 0.03葉)

発生ほ場率 30.4%(前年 4.5%)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(+)



(3) 防除上の注意

ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は7月中旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、最盛期から7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)

たたき落とし虫数1.3頭(平年 0.5頭、前年 0.9頭)

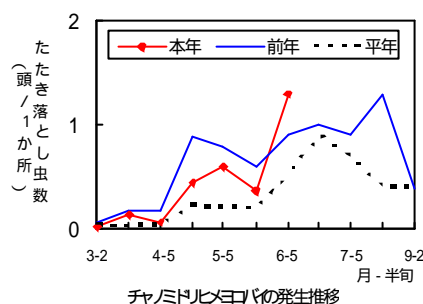
発生ほ場率 82.6%(前年 50.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(-)

(3) 防除上の注意

ア たたき落とし(A4版白紙上)で4頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



7 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)

たたき落とし虫数12.8頭(平年 7.2頭、前年 9.9頭)

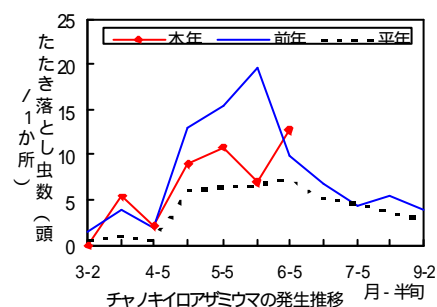
発生ほ場率 100%(前年 86.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(+)

(3) 防除上の注意

ア たたき落とし(A4版白紙上)で10頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



【野菜】

1 イチゴ(育苗期)のうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

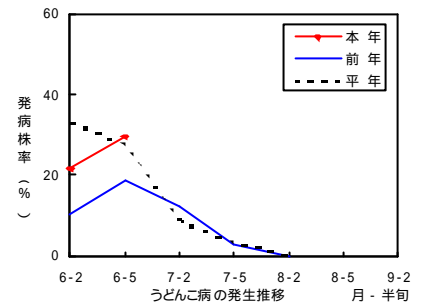
発病株率 29.5% (平年 27.7%、前年 18.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(-)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 「あまおう」は、「とよのか」に比べて発生は少ない傾向であったが、近年発生が増加傾向であるので注意する。

イ 伝染源である罹病葉は極力摘葉するとともに、育苗期の薬剤防除を徹底する。



2 イチゴ(育苗期)の炭そ病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生は認めていない(-)。

発病株率 0% (平年 0.4%、前年 0.3%)

イ 梅雨入り後の降雨日数が多く、発生に好適な気象条件が続いている(+)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(-)。

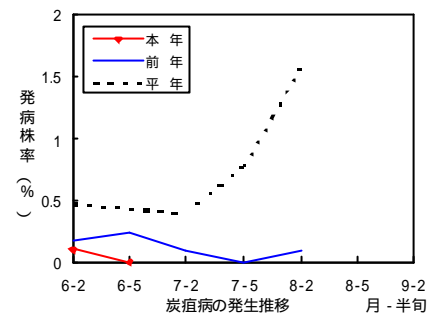
(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病は高温期の降雨やかん水により急速に蔓延するので、ほ場内での発生状況に注意し、罹病苗は速やかに持ち出し処分する。

イ 雨よけ育苗等で風通しが悪いと発生しやすいため、通風を図るとともに、鉢の土壤水分を適切に保つようにかん水を行う。

ウ 窒素肥料を多用すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。

エ 発病後の薬剤散布は効果が低い。葉かぎ作業直後や降雨前後に予防散布を行う。



【野菜・その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
イチゴ ハダニ類	少	並	並	・多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。 ・ほ場内や周辺の除草を徹底する。
アスパラガス 斑点性病害	やや少	やや少	並	・過繁茂にならないように摘葉を行い、ほ場内の通風をよくする。
アザミウマ類	並	並	並	・多発後は防除が困難となるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。
ハダニ類	やや多	並	並	
アブラムシ類	並	並	やや多	
鱗翅目	並	並	並	

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
野菜共通 コナジラミ類	並	並	並	野外に設置したトマト苗トラップによる捕獲数の推移は下図のとおり。 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照する。
<p>捕獲頭数(頭)</p> <p>150 100 50 0</p> <p>4/23 5/23 6/23 7/23 8/23 9/23 10/23 11/23 12/23</p> <p>トマ苗トラップでのタバココナジラミ類捕獲頭数の推移(筑後市)</p>				

6月～8月は「農薬安全使用運動」の実施期間です 農薬の適正使用、飛散防止対策の徹底を！

全ての農薬の残留基準値が農作物毎に設定され、基準値を超えた食品（農産物）は販売が禁止されます。

農薬の使用に当たっては、ラベルを確認し農薬の使用基準を厳守するとともに周辺に飛散（ドリフト）しないよう対策を講ずるなど十分注意を払って下さい。

1 農薬適正使用の徹底

適用作物、使用量、濃度、使用時期、使用回数などラベルを確認し使用基準を遵守する。

噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

他作物が隣接している場合は、なるべく双方に登録がある農薬を使用する。

2 飛散防止対策の徹底

風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 防除履歴の記帳

薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳する。

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ
電子メール

<http://www.jpnp.ne.jp/fukuoka>
kfok0301@sp.jpnp.ne.jp